

フランス知識人が見た日本の大陸・植民地政策（六）

—— ヴィシー政権の政治家と仏印進駐 ——

ワシーリー・モロジャコフ

要旨 本稿の目的は、一九四〇年の日本の仏印（インドシナ）進駐政策に対するヴィシー政権（フランス）の主役たちの意見と立場、その相互関係と決定の過程を説明することにある。本稿では、「政治」よりも、むしろ「政治家」にフォーカスした。そして、本稿では主な資料として、外交文書や新聞・雑誌の記事よりも、むしろ政治家たち——フランス国主席兼首相アンリ・フィリップ・ペタン元帥（Henri-Philippe Pétain: 一八五六～一九五二年）、外務大臣ポール・ボドウアン（Paul Baudouin: 一八九四～一九六四年）、植民地大臣であったアルベル・リヴィエール（Albert Rivière: 一八九一～一九五三年）、アンリ・レムリ（Henry Lémery: 一八七四～一九七二年）とシャルル・プラトン海軍小將（Charles Platon: 一八八六～一九四四年）の三人、国防大臣マキシム・ウエイガン陸軍上級大將（Maxime Weygand: 一八六七～一九六五年）、極東艦隊指揮官のちインドシナ総督ジャン・ドクー海軍中將（Jean Decoux: 一八八四～一九六三年）——のステートメント、ノート、日記、回想録を採用した。彼らはそれぞれ一流の知識人として、自身の専門的、総合的知識と分析能力に基づいて事情を把握、分析して、様々な方針を提案し、決定した。

キーワード…日本、フランス、仏印（インドシナ）、大陸政策、フランス敗戦、ヴィシー政権（フランス国）、仏印進駐

仏印進駐研究の実態と諸側面

一九四〇年の仏印（インドシナ）進駐は、歴史的にこれまで研究されてこなかったテーマだとは言えないが、様々な側面から異なる研究の実態が浮かび上がってくるテーマだと言える。最近このテーマを総合的に取り上げた研究論文『太平洋戦争はインドシナから始まった 一九四〇～一九四一年』（二〇一九年・フランス語版）を執筆したフランス人歴史学者フランク・ミシュラン（Franck Michelin）は、この問題を「よく研究されていながら、同時にあまり研究されていない」問題だと断定した。¹⁾

日本人歴史学者は、仏印進駐を研究するとき、それを日本の「南進」軍事・対外政策の一部と見なしてきた。政策の提案と実行、決定をめぐる討論と派閥間の闘争は、日本側の多数の史料に基づいて詳しく検討・概括されている。²⁾ 仏印の植民地化提案を含む経済的側面も研究されている。³⁾ 日本人学者は、主に日本発の資料をもとに、日本の政策を中心にしており、フランスの行動については「二次的」と見なしている。

一方、当時の国際関係史を注視するフランス人研究者の見方は、極端に仏独・仏英関係中心、欧州事情中心に偏っている。総合的な外交史研究論文の中では、仏印問題と日仏関係の検討は数ページ・数行だけに限られる。⁴⁾ 一般的に「ヴィシー政権」と呼ばれるフランス政府の政策を取り上げる総合的な研究論文の中でも、この問題は、ほんの些細なエピソードに過ぎないと見られている。⁵⁾ 仏印研究は、フランス植民地帝国の一部として、日本の拡大政策に対抗するインドシナ総督府とその機関による様々な行動を掘り下げている。⁶⁾ その著者は主にフランス発の資料を利用するが、フランク・ミシュラン博士（現在帝京大学経済学部国際経済学科教授）の場合は、両国の史料と研究論文の基

礎の上に革新的な議論を展開している。日本とフランス以外には、この問題に関する代表的な研究著作はほとんどない。

詳しい研究論文であっても、フランス側が主に注意する論点は、日仏交渉の発展と決定の過程であるが、本稿は、フランスの「政治」よりも、むしろ「政治家」にフォーカスする。仏印進駐問題をめぐるフランス側の主役たちは全員知識人であり、自身の専門的、総合的知識と分析能力に基づいて事態を検討し、様々な方針を提案、決定している。

本稿の内容は、その主役たち——フランス国主席兼首相アンリ・フィリップ・ペタン元帥 (Henri-Philippe Pétain: 一八五六～一九五一年)、外務大臣ポール・ボドウアン (Paul Baudouin: 一八九四～一九六四年)、植民地大臣であったアルベール・リヴィエール議員 (Albert Rivière: 一八九一～一九五三年)、アンリ・レムリ上院議員 (Henry Lémery: 一八七四～一九七二年) とシャルル・プラトン海軍小將 (Charles Platon: 一八八六～一九四四年) の三人、国防大臣マキシム・ウエイガン陸軍上級大將 (Maxime Weygand: 一八六七～一九六五年)、極東艦隊指揮官のちインドシナ総督ジャン・ドクー海軍中將 (Jean Decoux: 一八八四～一九六三年) ——の個人的な意見とその立場からする検討・分析である。そして、その主要な資料は、外交文書や新聞・雑誌の記事よりも、むしろステートメント、ノート、日記、回想録である。自分の行動と政策を弁解するために書かれた回想録については、綿密な学問的チェックが必要であるが、「エゴ・ドキュメント」としての価値は高い、と筆者は考える。

敗戦後フランスの新しい国際的地位と植民政策

一九四〇年六月のフランスの敗戦は世界的にショッキングな出来事であった。確かに予想外の敗戦は苦しかったが、

全面的なものではなかった。負けたのは第三共和国政権と陸軍だけである。世界的に有名なペタン元帥を首班とする新内閣（六月一六日の任命）は、本土の四割と外地・植民地の帝国、海軍を統制し続けた。六月二二日に締結された独仏休戦協定は、「フランスの終末」ではなく、時代の終わり⁽⁷⁾と新時代の始まりを意味した。しかし、六月一八日から、ロンドンに亡命したシャルル・ド・ゴール（Charles de Gaulle: 一八九〇～一九七〇年）は、BBCラジオで、イギリスと一緒に対独闘争を継続し、ペタン内閣に抵抗するよう呼びかけた。

休戦条件にしたがって、パリを含むフランス北部と西部はドイツの占領下に置かれ、政府は、南部の「ミネラル・ウォーターの首都」と呼ばれたヴィシー市に移った。七月一〇日、ヴィシーで開催されたフランス国民議会は圧倒的多数（出席者の八五%、全議員の六七%）で新憲法制定までの「憲法的な」法律を制定した。その内容は「フランス国の新しい憲法を公布することを目的として、ペタン元帥の権威および署名の下で成立した共和国の政府に全ての権限を与える」というものであった。⁽⁸⁾国民議会を中心とする第三共和国体制が終焉し、そのかわり強権的政権が設立された。「国父」と呼ばれたペタン主席は強大な権限を持つことになった。それと共に新しい政権の設立を準備し、実現したピエール・ラヴァル上院議員（Pierre Laval: 一八八三～一九四五年）は、副首相として内閣の中心メンバーとなり、首相のように日常活動を指導していた。

ド・ゴール派と共産党派のプロバガンダと歴史学では、ペタンとその政権はすべて「黒」く描かれているが、フランスの社会と学界には、より公平で多方面の解釈も存在する。ヴィシー政権の本質とその政策の判断・評価は本稿のテーマではないが、深く注意すべきはフランスの新しい国際的地位である。休戦のためフランスは中立国になって、イギリスとの国交を断絶したが、それでもナチス・ドイツの同盟国にはならなかった。⁽⁹⁾政府は海軍全体を統制して、植民地帝国の主権を守った。海軍総司令官フランソワ・ダルラン海軍元帥（François Darlan: 一八八一～一九四二年）

は、海軍大臣として新内閣の柱の一人になった（のち副首相兼外相、陸海軍総司令官など歴任）。外地・植民地の総督、陸海軍指揮官、在外大使・公使のほとんどが、この新政権をフランスの合法政府と認めていた。戦前に「親日」と評されたシャルル・アルセーヌ＝アンリ (Charles Arsène-Henry; 一八八一～一九四三年) 駐日大使 (一九三六～一九四三年) もその一人であった。

フランスの植民地政策の基本方針は、植民地帝国各地に向けたペタンのメッセージ (一九四〇年九月三日) の中に宣言された。「フランスは敗戦した。……しかし、千年の努力と犠牲によって鍛え上げられたその統一性は不可侵である。それに対して疑念を挟んではいけない。……今日、第一の義務は服従することである。第二の義務は政府の働きを親身に援助することである。フランスの王冠の最も素晴らしい宝石である帝国は、母国の呼びかけに『はい、かしこまりました』と答えるはずだ⁽⁹⁾。その「統一政策」の実現は、外務大臣ポドゥアン、植民地大臣リヴィエールとレムリ、国防大臣ウエイガンの任務となった。

仏印に対する日本の要求とインドシナ総督・フランス政府の反応

支那事变時における、仏印に対する日本の軍事的、経済的要求はよく知られている。第二次大戦勃発後も、フランス政府は日本に対して戦前の「紳士的な」政策を続けた⁽¹⁰⁾。フランスは東アジアでは戦闘していなかった。フランス政府が休戦を求めたというニュースは、仏印で「本当の激変」を引き起こすと共に「残された可能性」(ドクーの表現) への反応を誘発した。特に軍人には「戦闘継続」の感じが強かったが、ペタンの休戦に賛成して、ド・ゴールによる反政府の呼びかけに賛同する声はほとんどなかった⁽¹¹⁾。

インドシナ総督府の場合もつと複雑であった。一九三九年八月二三日に任命されて同月三〇日に仏印の首都ハノイに到着した新総督ジョルジュ・カトルー陸軍大将 (George Catroux: 一八七七—一九六九年) は、一八八七年以来、初めての現役将校だったので、彼の任命は日本への警告と見られた。カトルーは、第二次大戦勃発後、日本の要求に対していわゆる「理解している素振り」をよく見せたが、事実上、あまり協力はしなかった¹²⁾。

日本政府は、相手政府としてベタン内閣しか承認しなかったが、仏印に向けた南進の時が来ることは承知していた。ベタン首相がドイツ側に休戦を求めた後、六月一九日に谷正之外務次官はアルセーヌ・アンリ大使を通じてフランス政府に東アジアの現状に関する最後通牒を發した。日仏關係に新しい時代が始まったのである。

日本側の要求は事実上、最後通牒であつて、明らかにフランスの主権を侵犯していた。アルセーヌ・アンリ大使は、ポルドー市で休戦協定を準備していたポドゥアン外相と直截に連絡が取れなかつたので、時間を稼ぐために交渉を始めた。同時に、カトルー総督はハノイで、日本軍出兵の可能性について情報を受けた際、植民地省の許可なしに自発的に仏印から中国への燃料の通過を禁止して、日本側に一歩譲歩した。それと共にカトルーは、英米からの援助を求めたが、その試みは失敗に終わった¹³⁾。その情報が東京に届いた後アルセーヌ・アンリ大使は、日本側にカトルー総督の独断を隠し立てるために、燃料通過の禁止は彼〔大使〕の提案に従って行われたと發言した。六月二二日、休戦の締結日に、アルセーヌ・アンリは、谷外務次官と再び会談した際、日本側の最後通牒に賛成して、在仏印日本軍事使節団の問題も解決された。六月二五日にカトルー総督は、中国への全ての品物の通過を禁止した。

フランス政府が初めて仏印での新しい事態を知って討議したのは六月二五日の会議であつた。リヴィエール植民地大臣は、カトルー総督から届いた報告の内容を内閣に知らせた。ポドゥアン外相は日記に次のように記録している。

「カトルーはフランス政府の許可なしにトンキン州での我らの主権の一部を日本側に渡した。リヴィエールはその行

為に対して大変口惜しがった。我らに知らせた(リヴィエール)大臣とカトルー中将の電報交換によって、彼(カトルー)は決議する全権を要求した。そして、リヴィエールは、ただちにカトルー中将を「総督として」更迭することを提案した。後任者人事が問題になったが、ダルラン海軍元帥はドクー海軍中将を推薦した。彼(ドクー)が現地にいれば、確実に服従させることができる、(ダルラン)海軍元帥は述べた。内閣はこれに賛同した。総督の交代は一時的にも日本の要求を抑制すると思われる⁽¹⁵⁾。ウエイガン国防大臣の同会議の回想録の内容もこれと同じである⁽¹⁶⁾。

リヴィエールは、植民地大臣に適任でなかった、と言える。彼は一九二八年から、社会党の議会議員、国民戦線内閣の年金大臣(一九三六―一九三八年)であり、明らかに三流の政治家と見られていた。ペタンは組閣する際、社会党に二つのポストを提案した。党の首脳レオン・ブルム(Léon Blum: 一八七二―一九五〇年)は賛成して、党内で政治的に親しかったリヴィエールを推薦した。リヴィエールは、植民地関係問題には素人であり、専門家というより、社会党の駒の一つとして入閣したのである。ペタン内閣組閣時には植民地大臣というポストはそれほど大事な地位とは見られなかったらしい。しかし、仏印に対する日本の要求は、緊急を要する問題になっており、リヴィエールは明らかにそれを解決できなかった。リヴィエールは回想録を書いておらず、日記も未公開なので、当時の彼がどれほど思慮深かったのかは定かでない。

新総督に任命されたドクーは、一九三九年一月に極東艦隊指揮官に任命された後、五月上旬にサイゴンに到着して、同時に駐中国フランス派遣軍の最高指揮官になった。第二次大戦中ドクーは、日本の政策と行動に対して不審と憂慮を感じて、現地のイギリス海軍との協力を試みた。敗戦後ドクーは、イギリスと協力して戦いを続けることを訴えたが、ダルランからそれが不可能であるとの説明が届いた後、政府の命令に服従した。イギリスは、フランスの外地・植民地とその陸海軍を自ら統制する意向であることが明らかになった。ドクーは、イギリス国旗 Union Jack の下に奉

仕することを拒否したので、仏英軍事交渉（サイゴン、六月二八〜三〇日）は決裂した。⁽¹⁶⁾

六月二七日にダルランはドクーを新たに任命するむね電報で知らせた。六月三〇日にリヴィエール植民地大臣は、ドクーに正式な任命書を送って、カトルーにはただちに移管して帰国するよう命令したが、個人的に休戦に反対していたカトルーは、大臣の命令を無視して、六月二九日にハノイに到着した日本軍事使節団との交渉を自分で始めたのである。⁽¹⁷⁾

フランス政府がその次に仏印問題と対日関係を議論したのは七月四日の会議においてであった。リヴィエール植民地大臣は内閣にカトルーの独断と日本軍事使節団との交渉の幕開けを報告した。ボドゥアンは自分の意見を次のように記録している。「日本の立場を憂慮している、と私は内閣に述べた。（駐仏）沢田（廉三（一八八八〜一九七〇年）日本）大使に、その内閣の要求について説明を求めた。日本政府は、インドシナ総督ではなく、フランス政府と交渉をするはずだ。沢田はその発言を東京に伝えるはずだ⁽¹⁸⁾」。ペタンとウエイガンをはじめ内閣は同意した。⁽¹⁹⁾

カトルーは、全権なしに六月三〇日から日本軍事使節団と交渉して、七月四日に日本側に対して、反蒋介石政権との防衛同盟の締結を提案した。その条件は、日本政府が仏印領土の保全を公式に保障することであった。その後総督は、七月七日、中国との国境を通過することを一カ月停止し、七月九日には日本軍の仏印駐留を拒否したが、その糧食補給を許した。カトルーは政府と直接連絡することなく、自分の行動を一方的にアルセーヌ・アンリに知らせ、憂慮する大使はそれを外務省に報告した。⁽²⁰⁾

七月一四日、ボドゥアンはペタンにそのニュースを次のように報告した。「元帥はインドシナにおける我らの政策、中国と日本との関係について多くの質問を受けた。私は、フランスは日本と、防衛同盟を含む同盟を締結してはならないと述べた。なぜならその同盟は我らをすぐにも中国での戦争に巻き込むからだ。元帥は私の意見に完全に賛成し

た。インドシナにおける我らの軍隊は人数が減らされたので、我らの立場は特に弱くなっている。アメリカの支援は期待していない、と私は元帥に包み隠さず述べた」。外相はこの記録でカトルーの行動を判断した。「我らの弱さによってカトルー中將の行動を説明できる。日本の要求に鋭い拒否で答えなかった彼（カトルー）は多分正しかった。しかし、フランス政府の全権代表として行動している彼（カトルー）は全く正しくなかった」⁽²¹⁾。カトルーのその後の行動を非難したウエイガンの判断は、ボドウアンに近かった⁽²²⁾。ドクラーも当時の仏印防衛力の不足を具体的に説明している⁽²³⁾。

讓歩か抵抗か？ボドウアンとレムリ

ペタンはフランス国主席になった直後、改めて組閣を行った際、リヴィエールを解任して、植民地大臣にレムリを任命した。仏印進駐をめぐる出来事について、この忘れられた政治家の役割は重要だった。その生涯と行動を見てみよう。

当時六五歳のアンリ・レムリは、フランスの海外県マルティニークに生まれたムラートであった。パリで高等学校、大学法学部を卒業して、弁護士になり九〇歳まで開業していた。レムリは、一九〇〇年代初期から社会党の選出者として政界に入り、二回落選した後、一九一四年一月に議会議員に選ばれて、国民議会でマルティニークを代表した。第一次世界大戦中レムリは、義勇兵として参戦して、シャンパン、ヴェルダンとソンマで戦い、士官に昇進してレジオンドネール勲爵士になった。その後政界に戻ったレムリは、「勝利の内閣」と呼ばれた第二次ジョージ・クレマンソー内閣の商船國務次官補（一九一七年一月～一九一八年二月）を勤め、一九二〇年一月からマルティニーク選出の上院議員となった。内閣でのキャリアは短かった（法務大臣、第二次ガストン・ドゥメルグ内閣、一九三四年

一〇月（十一月）が、レムリは上院で、国際政治、植民地政策の問題について影響力のある演説を多数残している。

新植民地大臣への任命は、ペタンの個人的な選択であった。ペタンとレムリは、一九一六年にヴェルダンの戦いの中で知り合っており、一九三四年に一緒にドゥメルグ内閣の下で働いた。レムリは、基本的に政治家を嫌う「ペタン」元帥が信用した唯一の議員」だった、と言われている。²⁴⁾一九三〇年代後半、レムリは、ペタンの国際政治・法律問題の非公式な顧問になり、あまり人を信用しない元帥にもっとも親しい人物の一人であった。²⁵⁾知識人としてのレムリは、国際政治・法律・植民地政策問題の詳しい評論、分析ばかりでなく、マルティニーク史の研究論文も執筆している。青年時代から「左派」で知られていたレムリは、一九三〇年代後半に保守派、「右派」に近付いて、スペインのフランコ政権と白系ロシア人の反共産主義の戦いを支持した。ドイツに対しては、いつもゆるぎのない「反独」であった。²⁶⁾

ペタンの再組閣には、長期的な改革を行うための政府を立ち上げるといふ目的があった。新植民地大臣のレムリは、経験豊かな政治家、国際政治・植民地政策問題の専門家、知識人、ペタンと個人的に親しい戦友、フランスの愛国者、ドイツの敵であった。戦前から彼は「反ヒトラー・マニア」と呼ばれていた。²⁷⁾ナチス側は「反独ムラート大臣」の任務に反対して発言したが、ペタンはその隠喩を無視して、「〔植民地を〕統治する時代が来た」とレムリに語った。²⁸⁾レムリは、ペタンの政策と命令に絶対服従で、「現在の危機はロンドン放送とド・ゴールの反乱の呼び掛けだ」とただちに宣言した。「私の命令の実行に浮足立つ各位は、容赦なく召還される」と大臣は全ての総督に知らせた。²⁹⁾

リヴィエールと違ってレムリの立場ははっきりしていて、日本の要求に対しては抵抗の立場であった。陸軍の首脳と見られたウェイガン国防大臣はその方針を支持した。ではなぜポドゥアン外相は対日譲歩の政策を提案したのか。

当時四五歳のポール・ボドゥアンは、政治家ではなく、大手銀行のエクゼクティブだったので、政界には軽蔑を感じていたと言われている。第一次世界大戦の経験者、エコール・ポリテクニーク（理工科学校）の卒業生、経営・知

識エリートのメンバーであるボドゥアンは、一九三〇年からインドシナ銀行 (la Banque d'Indochine) の理事、常務理事兼極東金融連盟 (l'Union financière d'Extrême-Orient) 会長として地域の諸問題に詳しくかった。フランスの利益を経済的な立場から見たボドゥアンは、どの意味でも「親日」ではなかったが、日本の軍事・政治力およびフランスの脆さを理解していた。財界と親しかったポール・レノー首相 (Paul Reynaud: 一八七八―一九六六年) の招請によってボドゥアンは、その内閣で総理大臣の國務次官補、のちに外務次官補になった。ボドゥアンは、効率的なマネージャーであり、休戦の政策を支持したので、ペタンは彼を外相に任命した。対外政策の戦略の方針を自分で決めたいペタンは、日常の戦術的な作業のために勤勉な「外務事務局長」を探していたので、ボドゥアンを最適任者だと考えたのである。⁽³⁰⁾

ボドゥアンもレムリも、カトルーの不服従の姿勢とハノイにおける彼の対日交渉に憤慨した。七月一五日に沢田大使は、ボドゥアンと会談した際、交渉の内容はよく知らないが、「日仏問題を討議する場所はハノイではなくヴィシーだ」と発言した。ボドゥアンは、二国間関係を概説して、「インドシナが日本の経済体制に入るのは話にならない」が、経済的協力の可能性はあり、政治・軍事的同盟は不可能だが、「インドシナにおける仏日関係を決定する協定に至る可能性がある」と大使に説明した。⁽³¹⁾

七月一七日に、ペタン、ボドゥアンとレムリは再び仏印の事態とカトルーの不服従について討議した。レムリはカトルーに帰国を厳命したが、この更迭された総督がまさきに自分の次の役職について聞いてきたので、レムリもウエイガン国防大臣も憤激した。⁽³²⁾「日本人はカトルーからもらった優遇措置を何一つ放棄することはない、と私は確信している。彼ら〔日本人〕はハノイ〔総督〕から全部絞り取った後でヴィシー〔内閣〕に向かう」と外相は記録した。⁽³³⁾ボドゥアンの理解は正しかった。日本外務省は普通に外交官のチャンネルを通して交渉する方針を選んでしたが、軍部

の方は、現地で「全部絞り取る」つもりであった。⁽³⁴⁾

多数の障碍を克服してドクーは、七月十九日ハノイに到着し、総督府でカトルーと二人で会談して、この前任者の説明と弁明を聞いた。新総督は「敗戦したフランスからはほとんど切り離され、日本人に追及されていたインドシナ」を管理し始めた。⁽³⁵⁾ 七月二三日にレムリは、フランス内閣にインドシナ総督全権の公式な移管と対日交渉の継続を報告した。⁽³⁷⁾ カトルーは、ハノイから無事に出発したが、帰国せず、シンガポールに到着して、ド・ゴールの「自由フランス」への加入を宣言した。ヴィシーはそれを反逆罪と見た。⁽³⁸⁾

レムリ植民地大臣は、最初のドクー総督宛電報に「現在存在して将来に問題化する可能のある問題の講和的解決」の方針を示したが、日本側の弾圧が強くなった。ドクーは、どんな個人的イニシアティブも設定せず、政府の命令に絶対服従する、と日本側に知らせた。⁽⁴⁰⁾ それと共に総督は、フランス政府に交渉について報告した際、中国との国境を部分的に開放するが、日本側の統制に限度を定めることを提案した。七月二七日に内閣はその提案を承諾した。「日本人はカトルーからもらった優遇措置を何一つ放棄しない」と繰り返したボドウアンは「慎重な行動」を勧めた。⁽⁴¹⁾ ド・アテブで始めたもので、「ヴィシー政権の人」であるドクーの態度は初めからカトルーより強硬であった。⁽⁴³⁾

松岡・アルセーヌⅡアンリ交渉とフランス政府の反応

七月二二日に親任された第二次近衛文麿内閣は、「南進」政策の積極的な実行から着手した。新外相の松岡洋介は、就任直後、間もなく自身でフランスと交渉する意向をアルセーヌⅡアンリ大使に知らせた。八月一日の松岡発アルセー

ヌーアンリ宛覚書、実質的には最後通牒の提出から始まった日仏交渉は、主に日本側の史料からよく知られている。一九四三年に東京で死亡したアルセーヌ・ヌーアンリには日記も回想録も残されていなかった。そのシヨッキンゲン・ニユーヌーに対するフランス政府の反応の背景から見てもよい。

大使の東京発報告を読んでポドゥアンは以下のように記録した。「残念ながら、私の全ての憂慮は正しかった。それは、我らの敗戦とカトルーの譲歩の結果である。我らが最後通牒を受け入れれば、インドシナは失われてしまう⁽⁴⁴⁾」。八月三日、内閣は日本の新しい要求を検討した際、最後通牒を拒否して、軍事的侵入があつた場合には抵抗するようドクター総督に指令した。ペタン、ウエイガン、レムリは、日本を、大嫌いなドイツの同盟国と見なして、態度は最も決然としていた。レムリの回想録によれば「自分の視点は分かりやすかつた。一方、「日本との」断絶を防ぐための政策はポドゥアンに許すが、他方、どんな脅威と圧力にも屈することなく、日本軍が我が領土を侵害すれば軍事力で対抗する⁽⁴⁵⁾」。外相は次のように妥協を提案した。「フランスは、形式上、許容できない最後通牒を拒否するが、日本との交渉は続け、仏印主権の公式な保障が得られたら譲歩できる」。内閣は外相の議論に賛成した。ポドゥアンは、大戦の軍人であつたペタン、ウエイガン、レムリと違って、フランスの国威より、日本の弾圧の事態から自国の政治的、経済的利益を守ることを目的とした。同日外相は、沢田大使に政府の立場を直接説明する際、「友好関係の外見を保つことは両国に有益だ」と発言した⁽⁴⁶⁾。日本でナチス・ドイツの影響に反対した沢田大使は、相手のフランス人の隠喩を正しく理解したらしい。

英米側からの援助がなく、国民党政権から脅威のある事態に直面して、ポドゥアンが提案した妥協策は、時間を稼ぐ試みであつた⁽⁴⁷⁾。日本側の新しい要求が「最後通牒」と言わずに届いた後、外相は八月一二日に次のように事態を総括した。「肯定的な返事はいけない。それは我らの完全な脆さの告白になり、インドシナ、また他の植民地での反乱を

誘発する。……完全に拒否することなく合意の基礎をさがせるはずだ」。外相の記録によれば、同日の閣議に「ウエイガンは、日本の肉薄政策に服従するよりは、反対して戦う方がよい、と発言した。マルケー（内務大臣アルペール・マルケー（Adrien Marquet；一八八四～一九五五年）」は、その肩をもって、我らを助ける中国軍の軍事力について念を押した。私（ボドゥアン）」は、中国の、我らを早急かつ効果的に助ける能力に対して私には幻想がない、と答えた。……インドシナを救うのは、日本との合意だけで可能だ。残念ながら、事態ははつきりしている。我らが拒否で答えたら、日本は寄るべのないインドシナに侵入する。それは百パーセントの喪失になる。日本との交渉を続けられたら、植民地の完全な喪失という最悪の結果を避けて未来のために（インドシナを統治する）可能性を保つことができる⁽⁴⁸⁾」。

日本側に知らせる回答案の準備は、軍人も参加する会談が一回必要になった。ボドゥアンの記録によれば、同日夜に植民地省の会議室で「雷雲が生じた」。軍人は「植民地大臣は、日本の侵略に反対する戦いを支持すべきである。少しでも譲歩すれば、インドシナと他の植民地に悲惨な影響をもたらす、と発言した⁽⁴⁹⁾」。レムリ自身も次のように回想する。「自分は熱烈に話した。戦わないより戦って負けるほうがよい、と確言した。（インドシナで）戦えば、フランスは降伏しない、と帝国全体に知らせることができる。レムリは、ボドゥアンを「裏切り者」と明言することをせず、彼を政治家ではなく「財界の人」と評した。外相は「本業のために、インドシナと我らの外地・植民地全体に対して日本の脅威に屈する結果となることを心配しなかった」と、レムリは確信した⁽⁵⁰⁾。軍人は仏印の防衛力は十分だと確約したが、ボドゥアンはその判断に具体的に納得の行くやりかたで反対した。軍人の長老ウエイガンは、先に日本の要求を拒否することを支持したが、後に外相の有力な論拠に譲った⁽⁵¹⁾。当時ヴィシーでよく利用された発言「救えることを救う」もボドゥアンの記録に残っている⁽⁵²⁾。

外相の回答案に従ってフランスは、日本の要求を拒否した上で、日本陸軍にトンキン州を通り抜けることを許し、

その補給に同意して、両国関係を規定する条約に関する交渉を始める、と提案した。翌日、レムリはその提案を読ん
で思いがけず賛成した。これは最終的な決心でなかったとしても、その方向へ進む大事な一歩だった、と結論できる。⁽⁵³⁾
東京で松岡はアルセーヌ・アンリに圧力をかけ続けた。八月一六日、ボドゥアンはその情報を政府に報告して、「日本
との講和を選ぶ」ことをはっきり求めた。この時はベタン、ウェイガンを含む内閣が賛成し、レムリも大多数の意見
に従った。⁽⁵⁴⁾ 仏印における日本軍の駐留は東アジアのパワー・バランスを変更することになるので、ボドゥアンは政府
の決定を米国代理大使ロバート・マーフィー (Robert Murphy: 一八九四〜一九七八年) と中国大使顧維鈞 (一八八八
〜一九八五年・西洋で「Wellington Koo」) に説明した。⁽⁵⁵⁾ マーフィーは、日仏問題の講和的決定に対してはっと胸を撫
でおろした。⁽⁵⁶⁾

東京では交渉が続けられていた。アルセーヌ・アンリは綿密に各条目を検討したが、松岡の圧力のため譲歩を勧め
た。⁽⁵⁶⁾ ドクームもレムリも要求の拒否、軍事的抵抗の政策を進めた。「ボドゥアンと私の間の意見の完全な相違は機密にな
らなかった」とレムリは回想している。⁽⁵⁷⁾ 八月二七日政府は再び日本の要求を検討した。会議の前にボドゥアンは、ア
ルセーヌ・アンリの勧めに従って日本側が受け入れられるような協定案を準備し、ベタンはその文書を承認した。会
議中、外相の報告後、レムリはドクームの新しい電報を知らせて「内閣が決める」と発言した。外相の質問「〔植民地〕
大臣が何を提案するのか？」に対してレムリは具体的には答えなかった。政府は、八月一六日の立場を確認し、アル
セーヌ・アンリ宛訓令を承認した。レムリは一言も反対しなかった。会議の内容を長く記録したボドゥアンは次のよ
うに結論づけた。「自分が勧める政策に対して全ての責任を負う。「ノー」と言うより難しい交渉を続けるためにもつ
と勇気が必要だ。「ノー」と言うのは、「現地の」敗戦とインドシナの完全な喪失に至る間違いだ」。⁽⁵⁸⁾

その会議の翌日、八月二八日にレムリはボドゥアンにドクームの新しい電報を知らせて、再び譲歩の政策に反対した。

その行動は政府の決定に対して不服従と見られたので、外相は新しい会議を求めた。同日夜、ペタンの司会で集まったレムリ、ウエイガン、ダルランの前でポドゥアンは、植民地大臣の行為に激しく反論して、「望ましい提案とはどういうものかを定義してください」と述べた。レムリは何も提案せず、外相の立場と相違がない、と発言した。ペタンが内閣の合意を認めた後、参加者はドクー宛訓令の内容を討議した。それは、仏印防衛力を確認する命令であった。⁽³⁹⁾レムリは、回想録でポドゥアン宛書簡のエピソードを「忘れた」が、自分が提案した仏印防衛の措置を強調した。⁽⁴⁰⁾

フランス政府と仏印の新局面

八月二八日の会議の翌日、レムリは仏印防衛力に対するドクーの意見を求めた。八月三一日に総督は、軍用機、戦車、防空火器の不足を考慮することなく、「インドシナは守れる、守るべきだ」と述べた。「インドシナの喪失がリスクだとすれば、守って失うのは裏切つて失うより良い」とドクーは確信した。⁽⁴¹⁾しかし、その意見書は遅れた。八月三〇日に東京でアルセーヌ・アンリ大使と松岡外相は書簡を交換して協定を締結した。沢田大使から締結の知らせを聞いた後ポドゥアンは以下のように記録した。

「待望のニュースに対する反応は痛しかゆしであった。まず、〔問題の〕解決の手段として武力の行使を回避することができてよかった。しかし、起こりうる苦境に対し憂慮すべき点が多い。中国軍がインドシナに侵入するかどうか。日本軍の出現は、インドシナ住民にどのような影響を及ぼすか。日本占領の存続期間はどのぐらい長くなるのか。〔仏日〕協定は、大変な苦境への前兆である。だが、私が初めから確信したのは、難しくても交渉を

続け、インドシナを救う唯一の方針をとったのだと。」⁽⁶⁵⁾

ドクーの決然たる態度を知るペタンは、自分で総督に対して政府の決定を説明すると、八月二七日の会議で知らされた。⁽⁶⁶⁾ 八月三一日に、内閣は日本側と軍事問題交渉に関する訓令をハノイに送ったが、その伝達は時間がかかった。翌日レムリは、ドクー発「インドシナは守れる、守るべきだ」の電報（八月三一日付）を受け取り、ただちにその内容をボドウアンに知らせた。外相の返事は丁重かつ徹底していた。「ドクー海軍中将の発言は、尊敬すべき軍人精神を示す。しかし、政府の責任はこれとは異なり、母国に対する義務のため、もっと現実的な行為を遂行すべきである。政府が日本の脅威に対してリスクを無視して全て「の立場」を放置すれば、インドシナを裏切ることになる。以上をドクー海軍中将に知らせて、我ら「政府」は彼の最も厳格な規律を疑わないと伝えるべきである」⁽⁶⁷⁾。ペタンも総督に直接書簡を発送した。「あなたの心配と不安を理解する。私は、よく考えた後で政府に日本との交渉を許した。その交渉は、インドシナで大戦を阻止して、我らの主要な権利を守るべきだ。あなたが最善をつくして軍事的交渉を行い、全てのフランス人に規律の手本を示すことを私は期待する」⁽⁶⁸⁾。ドクーは、その命令に従ったが、日本側との交渉をできる限り引き延ばしていた。ハノイが再び交渉の主要な現場になった際、フランス政府は日本の新しい要求に反対する総督の努力を支援したが、日本軍の弾圧に抵抗するのは不可能になった。⁽⁶⁹⁾

九月六日にペタンは再び組閣を行い、ラヴァル副首相以外の全ての議員を辞職させた。「政治家」の代わりに「テクノクラート」が入閣した。⁽⁷⁰⁾ そしてレムリの政治的キャリアは終わってしまった。「自分は退職できる。我らの全ての植民地を固守する意思を見せた。少数軍人の反抗にもかかわらず、私は帝国全体でフランスの主権を存続させた」とレムリは結論づけた。⁽⁷¹⁾

第三共和国の行政・官僚体制に各省庁は自分の活動範囲と職権を極力守って他の省庁と不本意ながら協力していた。外相を継続するポドゥアンは、ドクーがハノイで行った対日交渉と形式的には関係がなかった。しかし、新植民地大臣プラトンは、東アジアの状態をほとんど理解しなかつたので、ドクー宛訓令を準備するときいつも外相の意見を求め相談した。⁽⁶⁹⁾ペタンは、両大臣の報告を定期的に受けたが、ナチス・ドイツとの複雑な関係に熟中していたので、アジア問題の解決を外相に委ねた。日本側から軍人はその交渉を完全に統制したので、外務省の役割が弱くなり、影響力のないアルセン・アンリ大使の活動は「ニュース報告」に限られた。⁽⁷⁰⁾一〇月二八日にポドゥアンは外相として退職を余議なくされ（ラヴァル副首相が兼外相になり）、総理の國務長官に任命されて、対日関係から全く離れた。

結論として

結論として言えば、一九四〇年の仏印危機、日本軍の進駐は、二〇世紀に初めてフランスが植民地を防衛する必要を引き起こした。仏印の状態および日本の要求に対してヴィシー政権の主役たちの反応は、その政治的な立場一般を反映していた。フランス国主席として帝国全体を考えるペタンは、東アジアに直接、干渉する可能性のないことを理解して、仏印よりもフランス・アフリカの防衛に専心した。ウェイガンは基本的にペタンに同意した。まずフランスの経済的立場と利益を守りたいポドゥアンは、仏印現地の事情をよく理解して、日本への政治的、軍事的譲歩をいとわなかつた。国威を懸念しているレムリは、日本に対する強硬な政策の可能な結果を十分に予想しなかつたと思われる。日本の要求に反対したいドクーは、その前任者カトルと違って、政府の訓令に不屈に従って、どんな譲歩にもかかわらず一九四五年三月九日の明号作戦まで仏印全体を統制していた。フランスの敗戦後の状態、アジアと世界の

パワー・バランスを深く考えていた知識人のヴェイシー政治家が打ち出した対日・対仏印政策は当時の国際情勢において合理的、現実的な政策だった、と判断できる。筆者は、戦争中ヴェイシー・フランス側から見た日本の大陸政策・植民政策と日仏関係の研究を続ける予定である。

註

本稿の引用は全て筆者がフランス語・英語から翻訳したものである。

- (1) Franck Michelin. *La guerre du Pacifique a commencé à l'Indochine, 1940-1941* (Paris: Passés Composés, 2019), p. 19 (電子版)。
- (2) 秦郁彦「仏印進駐と軍の南進政策、一九四〇～一九四二年」(日本国際政治学会編『太平洋戦争への道』第六卷(朝日新聞社、一九六三年)一四三～一七四頁)・長岡新次郎「南方施策の外交的展開(一九三七～一九四一年)」(日本国際政治学会編『太平洋戦争への道』第六卷(朝日新聞社、一九六三年)三～一四〇頁)・長岡新次郎「南進問題」(鹿島平和研究所編『日本外交史』第二二卷(鹿島平和研究所、一九七三年)・戸部良一「北部仏印進駐——『南進』の一断面としての考察」(『防衛大学校紀要——社会科学編』第三七号(一九七八年一月)三七～八八頁)・村上さち子「仏印進駐、一九四〇～四五」(非売品、一九八四年)・吉沢南「戦争拡大の構図——日本軍の『仏印進駐』」(青木書店、一九八六年)など。
- (3) 田淵幸親『日本の対インドシナ「植民地化」プランとその実態』(東南アジア学会編『東南アジア——歴史と文化』第九卷(山川出版社、一九八〇年)一〇三～一三三頁)・田淵幸親『大東亜共栄圏』とインドシナ——食糧獲得のための戦略』(東南アジア学会編『東南アジア——歴史と文化』第一〇卷(山川出版社、一九八一年)三九～六八頁)など。
- (4) 例えば、Pierre Queuille, *Histoire diplomatique de Vichy: Pétain diplomate* (Paris: Editions Albatros, 1976), pp. 81-82; Philippe Prévost, *Le temps des compromis: Mai - décembre 1940* (Paris: CEC, 2005), pp. 89, 146.
- (5) 例えば、Robert Aron, *Histoire de Vichy, 1940-1944* (Paris: Arthème Fayard, 1954), pp. 280-281; *La vie de la France sous l'occupation (1940-1944)* (Paris: Plon, 1957), p. 760-761.

- (9) Michel Devèze, *La France d'Outre-Mer. De l'Empire colonial à l'Union Française 1938-1947* (Paris: Hachette, 1948); Jacques Valette, *Indochine 1940-1945. Français contre Japonais* (Paris: SEDES, 1993); René J. Poujade, *L'Indochine dans la sphère de la coprosperité japonaise: De 1940 à 1945* (Paris: L'Harmattan, 2007); Sébastien Verney, *L'Indochine sous Vichy: entre Révolution nationale, collaboration et identités nationales, 1940-1945* (Paris: Riveneuve, 2012); Chizuru Namba, *Français et Japonais en Indochine (1940-1945). Colonisation, propagande et rivalité culturelle* (Paris: Karthala, 2012) [日本人著者がフランスで研究活動を行う] など。
- (7) 村田尚紀「戦後フランス憲法前史研究ノート(一)」「二橋研究」第二一卷第四号(一九八七年一月)一七七〜一七八頁。
- (8) ナチス・ドイツの立場を明らかにする代表的な史料の二編は、(Ed.) German Library of Information (New York), *Facts in Review*, Vol. II (1940), No. 1-52.
- (9) Philippe Pétain, *Actes et écrits* (Paris: Flammarion, 1974), p. 459.
- (10) 詳しくは、ワシリー・モロジャコフ「フランス知識人が見た日本の大陸・植民地政策(四)——支那事変とフランスのアジア政策」、『拓殖大学国際日本文化研究』第四号(二〇二二年三月)五六〜六〇頁。
- (11) Amiral [Jean] Decoux, *A la barre de l'Indochine. Histoire de mon Gouvernement Général (1940-1945)* (Paris: Plon, 1949), pp. 33-36.
- (12) Michel F., *La guerre du Pacifique a commenté à l'Indochine*, p. 34.
- (13) Decoux, *A la barre de l'Indochine*, pp. 44-49, 65-67.
- (14) Paul Baudouin, *The Private Diaries (March 1940 to January 1941)* (London: Eyre & Spottiswoode, 1948), p. 146. 筆者は『ホトゥアン日記のフランス語版が稀観本のため入手できず、綿密に訳された英語版を引用している』。
- (15) [Maxime] Weygand, *Mémoires. T. III. Rappelé au service* (Paris: Flammarion, 1950), p. 336.
- (16) 詳しくは、ワシリー・モロジャコフ「フランス知識人が見た日本の大陸・植民地政策(五)——支那事変からフランス敗戦に至る」、『拓殖大学国際日本文化研究』第五号(二〇二二年三月)五六〜五九頁。
- (17) Decoux, *A la barre de l'Indochine*, pp. 55-56, 67-68.

- (18) Baudouin P., *The Private Diaries*, p. 158.
- (19) Weygand, *Rappelé au service*, pp. 336-337.
- (20) Michelin F., *La guerre du Pacifique a commencé à l'Indochine*, pp. 37-46; Decoux, *A la barre de l'Indochine*, pp. 68-70.
- (21) Baudouin P., *The Private Diaries*, p. 169.
- (22) Weygand, *Rappelé au service*, p. 337.
- (23) Decoux, *A la barre de l'Indochine*, pp. 73-90.
- (24) Aron R., *Histoire de Vichy*, p. 31.
- (25) Jacques Isorni, *Philippe Pétain*, T. 1 (Paris: La table ronde, 1972), pp. 384-387; Raymond Tournoux, *Pétain et la France* (Paris: Plon, 1980), pp. 18-19, 35-36.
- (26) ノムリの生涯・行動に関する総合的な研究はまだなく。国際政治関係の論文・演説集は、Henry Lémery, *De la guerre totale à la paix mutilée* (Paris: Alcan, 1931); (前書*) *La justice du 'Front populaire' en Espagne* (Paris: Éditions de France, 1937); *La Russie et la France* (Paris: Amis de la Russie nationale, 1939); *De la paix de Briand à la guerre d'Hitler* (Paris: Vigneau, 1949) 45頁。歴史・植民地問題の関係著作は、Henry Lémery, *La Révolution française à la Martinique* (Paris: Larose, 1936); *Martinique, terre française. Le conflit des races et l'opinion métropolitaine* (Paris: G.P. Maisonneuve & Larose, 1962) 45頁。資料的価値が高く回想録は、Henry Lémery, *D'une République à l'autre. Souvenirs de la mêlée politique, 1894-1944* (Paris: La table ronde, 1964)。
- (27) Aron R., *Histoire de Vichy*, p. 31.
- (28) Gilles Raguache, *L'Outre-Mer français dans la guerre (1939-1945)* (Paris: Economica, 2014) p. 43.
- (29) Lémery H., *D'une République à l'autre*, p. 251.
- (30) ホェウアンの生涯・行動の総合的な研究はまだないので、その日記が大事な史料と見られる。
- (31) Baudouin P., *The Private Diaries*, p. 170-171.
- (32) Lémery H., *D'une République à l'autre*, pp. 252-253; Weygand, *Rappelé au service*, p. 337.

- (33) Baudouin P., *The Private Diaries*, p. 173.
- (34) Michelin F., *La guerre du Pacifique a commencé à l'Indochine*, pp. 47-48.
- (35) 詳しくは、ドクター発レムリ宛書簡（一九五一年一月一日）は、Lémery H., *D'une République à l'autre*, pp. 327-328.
- (36) Decoux, *A la barre de l'Indochine*, pp. 71-73.
- (37) Baudouin P., *The Private Diaries*, p. 178.
- (38) Lémery H., *D'une République à l'autre*, p. 253.
- (39) Decoux, *A la barre de l'Indochine*, p. 57.
- (40) Decoux, *A la barre de l'Indochine*, p. 91-96.
- (41) Baudouin P., *The Private Diaries*, p. 184.
- (42) 例として、Colonel [Julien] Legrand, *L'Indochine à l'heure japonaise* (Cannes: A compte d'auteur, 1963).
- (43) Michelin F., *La guerre du Pacifique a commencé à l'Indochine*, pp. 48-56; Decoux, *A la barre de l'Indochine*, pp. 92-94.
- (44) Baudouin P., *The Private Diaries*, p. 187.
- (45) Lémery H., *D'une République à l'autre*, p. 254.
- (46) Baudouin P., *The Private Diaries*, pp. 187-189; Weygand, *Rappelé au service*, p. 337.
- (47) Baudouin P., *The Private Diaries*, pp. 193-196; Weygand, *Rappelé au service*, p. 338.
- (48) Baudouin P., *The Private Diaries*, pp. 198-199.
- (49) 同上, p. 199.
- (50) Lémery H., *D'une République à l'autre*, pp. 255-257.
- (51) Weygand, *Rappelé au service*, pp. 337-338.
- (52) Baudouin P., *The Private Diaries*, pp. 199-201.
- (53) 同上, p. 201.
- (54) 同上, pp. 203-204.

- (55) 同十' pp. 204-205.
- (56) Michelin F., *La guerre du Pacifique a commencé à l'Indochine*, pp. 68-74.
- (57) Lémery H., *D'une République à l'autre*, pp. 257-258.
- (58) Baudouin P., *The Private Diaries*, pp. 218-220. ノムリが知らせたメナー発電報(八月二四日)は' Decoux, *A la barre de l'Indochine*, pp. 97-98.
- (59) *メナーの綴字記録' Baudouin P., *The Private Diaries*, pp. 220-222.
- (60) Lémery H., *D'une République à l'autre*, pp. 258-259.
- (61) Decoux, *A la barre de l'Indochine*, pp. 101-102.
- (62) Baudouin P., *The Private Diaries*, p. 223.
- (63) Lémery H., *D'une République à l'autre*, p. 258.
- (64) Baudouin P., *The Private Diaries*, p. 227. ノムリ発メナー宛訓令' Decoux, *A la barre de l'Indochine*, pp. 105-106.
- (65) 同十' p. 102.
- (66) Baudouin P., *The Private Diaries*, pp. 228-230, 234-235. 日仏軍事交渉は' 本稿のテーマ以外では' フランス側の立場に' 5' Decoux, *A la barre de l'Indochine*, pp. 103-122; Michelin F., *La guerre du Pacifique a commencé à l'Indochine*, pp. 79-121. 5'.
- (67) 誰' Aron R., *Histoire de Vichy*, pp. 166-175.
- (68) Lémery H., *D'une République à l'autre*, p. 260.
- (69) Baudouin P., *The Private Diaries*, pp. 242, 244-245.
- (70) 同十' pp. 245-252.